やさしいまちに、なりたい。

令和7年度

指導の重点・主な施策

～とだっ子 やり抜く力で 未来に夢を～

戸田市教育委員会 facebook

戸田市教育委員会

指導の重点・主な施策について

学習指導要領に基づいた「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」といった児童生徒の資質・能力の３つの柱と「教科固有の見方・考え方」、「主体的・対話的で深い学び」、「習得・活用・探究」の視点による「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」をとおし、日々の授業改善につなげるとともに、カリキュラム・マネジメントの取組を一層進めていくことが求められている。

戸田市教育委員会では、「戸田市の教育振興に関する大綱」（令和３年４月策定）及び「第４次戸田市教育振興計画」（令和３～７年度）を基盤に、国や県の動向や各学校の実態を踏まえ、戸田市の子供たちがこれからの変化の激しい時代を主体的に生き抜き、よりよい豊かな未来の創り手となれるよう、各施策を実施する。

この「指導の重点・主な施策」は、令和６年度に実施した埼玉県学力・学習状況調査や全国学力・学習状況調査の結果分析や、学校訪問等を通して明らかになった課題の解決や日々の授業改善に向け、各学校で行う教育活動の指針を編集したものであり、手の届くところに置かれ、授業づくりの一助となるよう作成した。各学校においては令和７年度の指導の重点として、本冊子を十分に活用し、自校の実態に即して学校教育の充実を図ること。

第４次戸田市教育振興計画

基本理念：生き生きと 共に育む 教育のまち 戸田
キャッチフレーズ：とだっ子 やり抜く力で 未来に夢を
方針１：子供たちが可能性に挑戦し続ける力を育むための学びの実現
方針２：多様性を尊重し、全ての子供たちが力を発揮できるような誰一人取り残さない学びの保障
方針３：地域・家庭・産官学民などの多様な主体による学びの提供
方針４：個別最適な学びの実現に向けたＥＢＰＭの推進

計画本文、紹介動画はこちら

■令和7年度　戸田市立小・中学校における標準授業時数

▼小学校

	各教科										特別の教科道徳	外国語（英語）活動	総合的な学習の時間	特別活動	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語（英語）					
第１学年	306	－	136	－	102	68	68	－	102	－	34	－	－	34	850
第２学年	315	－	175	－	105	70	70	－	105	－	35	－	－	35	910
第３学年	245	70	175	90	－	60	60	－	105	－	35	70	35	35	980
第４学年	245	90	175	105	－	60	60	－	105	－	35	70	35	35	1015
第５学年	175	100	175	105	－	50	50	60	90	70	35	－	70	35	1015
第６学年	175	105	175	105	－	50	50	55	90	70	35	－	70	35	1015

●小学校中学年における外国語（英語）活動の実施について

本市全小学校は、中学年の「総合的な学習の時間」を３５時間削減し、外国語（英語）活動を３５時間実施することが可能となっている。これは、全小学校が学習指導要領等の教育課程の基準によらない特別の教育課程の編成・実施を可能とする教育課程特例校（令和２年１月２２日文部科学大臣承認）となっていることに基づくものである（期間は、次期教育課程変更日まで）。

※新曽小学校・戸田東小学校については、中学年外国語(英語)活動の実施とともに、別の教育課程特例が承認されている（令和4年4月1日より）
※令和7年度研究開発学校については、中学年外国語（英語）活動の実施とともに別の教育課程特例が承認されている。（令和7年4月より）

●小学校学習指導要領における外国語（英語）活動及び外国語（英語）への短時間学習の導入について

本市の中学年の外国語（英語）活動については、平成１５年度から３５時間実施しているが、さらなる英語教育の充実を図るために３５時間増とし、合計７０時間とする。中・高学年の３５時間分の実施方法については、１５分間の短時間学習を３回行うことにより１単位時間（４５分）に換算することとする。なお、低学年の外国語（英語）活動については、余剰時間や短時間学習も含めて２０時間程度とする。

※研究開発学校については、1単位時間（小学校40分・中学校45分）に換算することとする。

▼中学校

	各教科									特別の教科道徳	総合的な学習の時間	特別活動	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	外国語（英語）				
第１学年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	50	35	1015
第２学年	140	105	105	140	35	35	105	70	140	35	70	35	1015
第３学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	70	35	1015

※戸田東中学校については、上記内容とは別に授業時数特例が承認されている（令和4年4月1日より）

アクティブ・ラーニング指導用ルーブリック

アクティブ・ラーニングの視点から、不断の授業改善を図るため、授業を自己・他者評価する際の基本的な５つの視点を指導用ルーブリックとして示した。

視点１と視点５は、授業で目指すべき目標と学びの評価であり、これらは授業の根幹である。

1 児童生徒が目標を理解し、課題に興味をもって取り組んでいたか。
【目指すべき目標･評価規準の設定等】

□指導計画に基づき、適切な目標(資質・能力の三つの柱に基づき「何ができるようになるか」)が設定できたか。
□本時の目標に正対する評価規準・評価方法が設定できたか。
□児童生徒の学習意欲を高められる導入場面であったか。（学習問題や課題の工夫、提示方法の工夫など）

2 児童生徒が自分の考えを表現することができていたか。
【主に主体的な学びの視点】

□本時の課題を正しく伝え、見通しをもたせることができたか。
□自分の考えを表現することができるように、（主につまずいている児童生徒への）支援方法を準備し、支援することができたか。
□自分の考えを表現することができるように、教具の工夫、適切な時間や場の設定等の準備ができたか。
□学習活動は、目標の実現につながっていたか。

3 児童生徒が友達の発言を受け止め、自分の意見と比べていたか。
【主に対話的な学びの視点】

□児童生徒の考えを広げ深められるような、学習形態（個人、ペア、グループ、全体）は設定できたか。
□児童生徒の考えを広げ深められるよう、教具（具体物、ＩＣＴ等）を工夫し用いていたか。
□目標の実現につながるように児童生徒の考えを可視化（ホワイトボード、ＩＣＴ等）できたか。

4 児童生徒が思考・判断・表現する活動を通して「見方・考え方」を働かせていたか。
【深い学びの視点】

□児童生徒が本時に働かせるべき「見方・考え方」は、明確であったか。
□児童生徒に「見方・考え方」を働かせることができる学習活動を設定することはできたか。
□児童生徒が働かせていた「見方・考え方」を可視化（ホワイトボード、ＩＣＴ等）できたか。

5 児童生徒が「分かったこと」「やったこと」や「できたこと」など、学びの成果や課題を実感していたか。
【学びの評価・振り返り】

□評価規準・評価計画に基づき、本時の児童生徒の学習状況を捉え、個々・グループ等へ支援する（キャッチ＆レスポンスする）ことができたか。
□目標に準拠した指導と評価となるよう、学習の状況を適切に評価することができたか。
□児童生徒が本時の学習を振り返ることができる場面が設定できたか。

本ルーブリックを本時の授業の振り返りとしてだけではなく、単元全体を構成する段階でも積極的に活用し、単元の中で「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指し「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図ることが重要である。その際、目の前にいる児童生徒を見つめ（児童生徒観）、学習指導要領の内容を把握した上で教材の効果的な活用を考え（教材観）、どのように指導をするのか（指導観）という「観の視点」から各教科の本質に迫る授業づくりを行うことが大切である。

あわせて、児童生徒が授業の目標を達成できるよう教材・学習材・主題といった「材の視点」から学習環境を工夫し、教師の働きかけにより、各教科の「見方・考え方」を働かせながら学びを深める「主体的・対話的で深い学び」につなげることが重要である。

文部科学省委託事業　教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究実施報告書（平成30年3月）

グッドプラクティスから見える授業改善のポイント

埼玉県学力・学習状況調査の結果をもとに、学力を特に伸ばしている市内小・中学校教師の同調査の教職員調査回答状況を分析した結果、日々の授業において次のような拘りをもっていることが分かった。そこで、それらを効果的な指導方法(グッドプラクティス)とし、授業改善のポイントとして全小・中学校で共有化を図った。

・児童生徒の学力を特に伸ばしている教師の共通点（令和５年度埼玉県学調・教職員調査より）

○本時の課題を正しく伝え、見通しをもたせている
○評価規準に基づき、キャッチ＆レスポンスができている
○目標と指導と評価を一体的に捉え実践している
○一人ひとりの伸びや変容をつかみ、積極的に認め称賛している

1 単元を見通した授業づくり

・単元とは、単なる内容や教材、活動や時間のまとまりではなく、子供が見通しを持って数時間の学びを進められるような学習過程のまとまりである。単に一単位時間の授業を積み上げれば単元になるわけではない。授業は一単位時間ごとに区切って行われるが、学習者にとっては、一つのストーリーとしてつながっていることが望まれる。

・そのため、単元全体で身に付けるべき資質・能力を明確にし、単元終了時の学びの姿を意識し、目標や単元計画を立てることが重要である。そして、単元を見通した「課題」や「問うべき問い(※)」「授業の山場(※)」を設定し、深い学びにつなげていくようにする。

2 「引き出す」「つなげる」「深める」授業づくり

・主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善をするためには、子供の実態や理解度を把握し、考えや興味・関心を「引き出し」、子供の意見を他の子供に「つなげ」、それらを練り上げ、「深める」ことが重要である。

①子供の意見や考えを「引き出す」ための教師の関わり方

子供の意見や考えに対して肯定的な接し方（うなずき、繰り返し）を心掛ける。このことにより、子供が安心して発言できる環境づくりにつなげる。さらに、発言やグループ活動での会話の場面、デジタル上に表出される気付きなどを含め、積極的につぶやきを拾う。待つことの大切さを自覚し、教師は話しすぎない。

②子供の意見や考えを他の子供に「つなげる」ための教師の関わり方

「〇〇さんがどのように考えたか、分かりますか」「〇〇さんの考えを別の言い方で言えますか」「〇〇さんの考えでいいところはどこだと思いますか」「〇〇さんがこのように考えた理由が分かりますか」など、子供の意見や考えを教師が他の子供につなげることで、子供同士の深い学びを生むきっかけづくりをする。そうした「想像説明」などを行い、対話が広がるように努めていく。

③子供の意見や考えを「ゆさぶり(※)」「練り上げ(※)」、「深める」ための教師の関わり方

全体での子供の発言に対し、「いいね」「がんばりましたね」といった称賛で終わらず、「なぜ？」「どうして？」や「どんなところを工夫したの？」など、子供の思考過程を明らかにし、見方・考え方を問い返し、「板書(※)」等で考えを可視化することで、思考を深め、発言の価値を高める。

【留意点】
子供の活動を適切なタイミングで止め、全体指導を入れることも必要である。ただし、子供の学びの流れを止める可能性があることに十分留意する。

（例）
・個の発言を価値付け、学級全体に広げたいとき
・児童生徒の話合いの視点がずれてきたとき

3 キャッチ＆レスポンスによる授業づくり

・教育的タクトの感度を上げるために、目標に即し、子供たちの学習状況を捉え（キャッチ）、個々・グループ等への机間指導における声かけ（レスポンス）を充実させる。そのためにも、深い教材研究が極めて重要となる。また、本時主義に陥らず単元を通して評価内容・方法、タイミングは授業前に設定する。

（※）は、授業づくりにおいて大切にしてほしい言葉

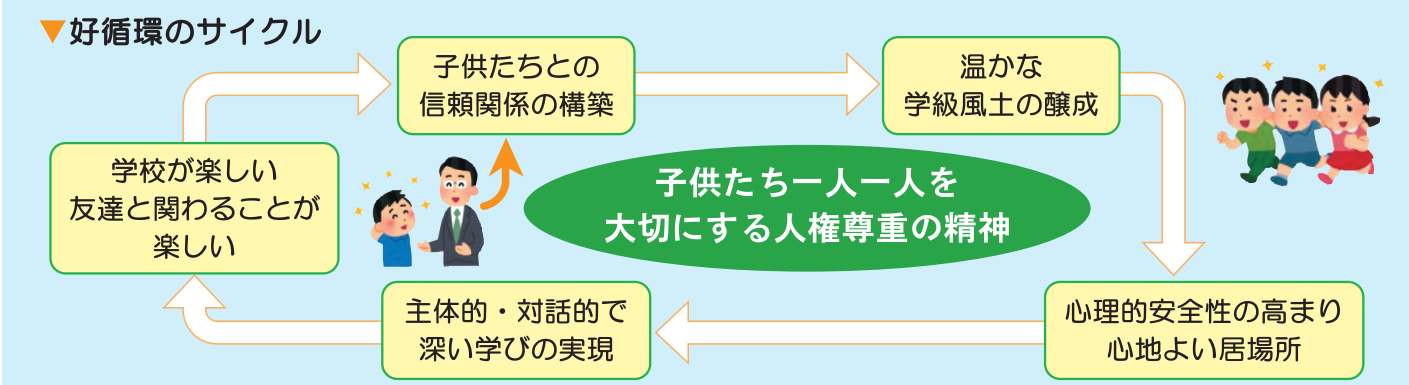
グッドプラクティス R2～R6　R2　R3　R4　R5　R6

学級経営リフレクションシート　令和7年度の重点項目

学級経営の充実に向けて、令和６年度に市内教職員が行った学級経営リフレクションの結果から見えてきた傾向をもとに、令和７年度の重点項目を紹介します。

学級経営の充実のための前提として　学級経営の充実に向けて、子供たちとの信頼関係をどう築くか

▼好循環のサイクル



※特別活動と埼玉県学力学習状況調査の分析より

学級経営リフレクションから見えてきた学級経営の課題

25. 目指すべき学級の姿や目標を子供と共有し、形骸化することなく様々な場面で生かしたり、振り返ったりする。
28. 子供同士が折り合いを付けたり、納得解を導き出したりできるように、集団におけるよりよい意思決定の仕方を指導している。
30. 子供の発意・発想を生かした活動を支援し、子供たち自身が学級文化を創り出せるようにしている。

※第７回戸田市教育政策シンクタンク　アドバイザリーボード参照

学級経営の充実のための前提として と 学級経営リフレクションから見えてきた学級経営の課題 を踏まえて

学級経営を充実させるための令和７年度の重点項目

【落ち着いて過ごせる環境をつくる】

24. 間違いや誤った意見も大切に扱い、子供たちが意見を述べやすい雰囲気づくりをしているか。
※教師の指導観として、日々の授業の中で次のことを意識して子供たちに伝えていく。
教室は間違える場所であること。間違いや誤った意見を笑うことは間違っていること。自分の考えを伝え合うことで他の人の学びも深まること。

【子供の関係や集団の力を高める】

29. ルールや決まり等を決める際は、子供たちの意見を取り入れたり、話し合わせたりして、子供自身が自己決定したと感じられるようにしているか。
※教師の指導観として、次のことを意識して子供たちと関わっていく。
学級や学校を子供たちとともに創り上げていくこと。子供が自己決定する場面を意図的に計画し、自己決定したことに対して見届け、声をかけ励ましていくこと。

【例】教科等の指導と特別活動の指導の往還

学級活動（１）で、話合いを通して合意形成を図り、実践活動を経て、振り返りを丁寧に行う。学級活動（２）（３）で、意思決定をし、自分の決めた目標の取組等を実践期間中、声をかけ見届ける。また、教科等の指導の中でも話合いや合意形成、意思決定する場面を意図的に仕組み、そのよさを価値付ける等。

全教育活動で、教科等横断的な視点をもち、上記２項目に重点的に取り組み、学級経営の充実を目指しましょう。また、学級経営リフレクションシートを活用し、自分と子供たちとの関わりや、子供たち同士の関わりを客観的に振り返り、明日からのよりよい学級経営を目指しましょう。

チェック
学級運営
リフレクション
シート

リフレクションシート　活用方法

子供たちが本気になるPBLの１０の要件と、ベー

令和６年夏に実施した「学級経営リフレクション」では、「UDの視点を取り入れ、どの子供にとっても過ごしやすい教室環境づくりに努めているか」の項目が有意に低いという結果が出ています。

心理的安全性が確保された学級づくりや、ＰＢＬの推進のためには、すべての児童生徒が学習に向かえるようにするための「授業のユニバーサルデザイン化」の視点が重要です。

ここでは、子供たちが本気になって課題の解決に取り組む様子が見られた授業に共通する視点を「子供たちが本気になるＰＢＬの１０の要件」として整理しました。そこに、ＰＢＬ・ユニバーサルデザイン、それぞれの視点からのポイントを加えて解説します！

〈PBLの視点〉

□目の前の子供たちの学習経験やその経験から得られた成果について把握していますか？
＊前学年の担任等から話を聞く（どのような材で、どのような活動をしたか等）。
＊子供たちから直接話を聞く、子供たちにアンケートを取る。等

□子供たちが材との関わり合いを深め合う姿を思い描いていますか？
＊**教材の特性**を明らかにしたり、**単元の中心的な活動**を明確にしたりすることが重要。
教材の特性については、ウェビングを使用し、次の点を明らかにする。
◎繰り返し対象に関わることができるか。◎学習活動が広がり、発展していくか。
◎実社会や実生活について、多面的・多角的に考えることができるか。

□いきなり解決策を考えるような単元構成になっていませんか？
＊「給食の残食があるので給食のよさを伝えよう」といった、問題に対してすぐに解決策（HOW）を出すのではなく、「なぜ給食が残るのか」という**原因（WHY）を追究**したり、先行事例を調べて分析する活動をした後に解決策を考えたりするよう促すことが大切。

□子供がもっている知識を関連付ける活動を設定していますか？
＊単元を通して材に関する知識（●●は▲▲である）を多く獲得する。これらの知識をそのままにしておくのではなく、クラス全体で**話し合う場面を単元の中に意図的に設定**することが必要。その際、教師は**板書**で子供たちの思考を整理することが有効。
※知識を関連付けて考えることで、**概念的な知識**を獲得することにつながる

□想像の世界やネット等の情報だけで議論していませんか？
＊防災に関わる活動を行うのであれば、日々防災の仕事に携わる人々の思いや願いを聞く活動を設定したり、そうした人々から自分たちの活動についてフィードバックをしてもらったりする活動を単元の中に必ず位置付けることが重要。

□子供たちの活動の様子をよく見ていますか？
＊本単元（本時）の**評価規準**に基づき、子供たちの活動に対して評価を返していくことが必要。
＊**価値付け**を行う際には具体的に何がよいのかを言語化し伝える。
「〇〇がいいね」「〇〇しようとしているところがゴールに向かいそうだね」
＊**意味付け**を行う際には、本時のねらいに対して子供たちの考えたことを言語化し伝える。
「Ａさんが言っていたことは『●●』ということかな？」

□授業の中で先生だけが話し過ぎていませんか？
＊子供たちが活動を通して思考したことをアウトプットし、自覚するために**思いのたけを語る時間を確保する**ことが重要。また、自らの考えがよりよい課題解決につながっていくかどうか吟味するためにも**自分の言葉で語る**ことが重要。

令和３年度に示した戸田型PBLにす

単元設計の際にチェックすること

□「誰の何のため」という、対
▲水害を調べて発表しよう⇒◎必要な防災
□ 解決（目標の達成、理想の実
▲ゴミを拾う人を増やすことがゴール⇒◎
□「あなたなら何をするか」
▲防災とは何かを考えよう⇒◎防災について
□ 解決したかどうかを検証し
▲最終結果をまとめて発表した⇒◎未解決
□ 振り返りの視点を示し、
▲チェックシートに〇×を付ける⇒◎何を
□ 探究的な学習のプロセスを
戸田型ＰＢＬ発展のイメージについては、
「令和３年度 戸田市 指導の重点・主な施

PBLがうまく

◆単元づくりにおいて

①子供たちの興味・関心、学びの
②材(※)の教材研究を行い、本質的
③実現可能な課題となるよう、発
難易度を調整している。
④問題に対してすぐに解決策を出
な単元構成にしている。
⑤個々が材に対してもっている知
定している。
⑥材に関わる本物（人・もの・こ

※「材」とは、「教材・学習材・主題」

◆授業内において

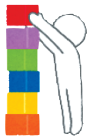
⑦子供たちが学びやすい環境を構
⑧グループ等での話合いの際に、話
⑨子供たちの話合いの様子に耳を
値付けや意味付けを適時行って
⑩「どうして？」「なぜ？」など、
し、子供が自分の言葉で語る時

ースとなるユニバーサルデザイン（UD）の視点

子供たちが本気になって課題の解決に取り組むようにするためにはどんなことに気を付けてＰＢＬの単元づくりをしたり、授業内で子供たちと関わったりすればよいのでしょうか？

＊すべての学校活動において、**子供を主語にした学び**を目指している。
＊学校教育目標に基づき、各教科等を**横断的・系統的**に設計し、組織的に取り組んでいる。
＊安心して自由な発言ができる**心理的安全性を意識した環境づくり**を行っている。
ことが大前提です。

教育におけるユニバーサルデザインとは、「**すべての子供にとって分かりやすく学びやすい教育をデザインすること**」です。
ここでは、**①取り組みやすくすること、②理解しやすくすること、③選択肢を用意すること**について特に取り上げます。



するための要件を踏まえた上で…

象と目的が具体的かつ明確である
災グッズを親に提案し、家族を守ろう！
実現）をしたかの基準が明確である
◎ゴミ拾いイベントに１００人集めたらゴール
という実行方法を問う課題である
て知ってもらうために私達に何ができるだろうか？
、次につなげる活動の時間がある
決理由を探り、改善策を考え（実行し）た
学びの自覚化を促す時間がある
を学び、どう活かすか等を子供自身が言語化する
繰り返し、学びを発展させている
右記ＱＲコード
施策」を参照

いく10の要件

様相を把握している。
的な価値について言語化している。
達の段階に応じて取組のゴールの
そうとせず、原因を追究するよう
識について全体でつなぐ活動を設
と）にふれる時間を設定している。
の総称（P.3 ALラーニング指導用ルーブリック参照）

成している。
合いの視点を明示的に指導している。
傾け、子供たちの活動を深める価
いる。
理由を問うような問いを子供に返
間を保障している。

〈ユニバーサルデザインの視点〉

□子供たちの興味・関心を活かした単元構成になっていますか？
＊興味がないことは学びにくいため、**子供たちが自己決定したと感じることができるような単元構成**にすることが重要。そのためにも、単元設計の前に子供たちの実態を把握することが必要。
＊意図的に各教科等で学習した内容を取り入れることや、「自分だったらどうする？」と、課題を自分事につなげる問いを組み込むこと。

□「一人一人にあった支援」は充実していますか？
＊子供たちが「難しすぎる」と感じたり、「自分にはできない」と感じたりすると、探究し続けることができないため、実態に応じた支援が必要。そのためには、**実態に応じてどのような支援が必要かを単元設計の段階で検討しておく**ことが大切。
＊「一人一人にあった支援」とは、ステップを踏み出すために必要な踏み台を置くイメージ。子供の実態によって、様々な選択肢から踏み台を選択できることが重要で、すべての子供に同じ踏み台を用意することではない。例えば、「思考を整理することが難しい児童生徒」である場合、思考ツールやひな形を提示して文字言語で整理したり、動画で自分の考えを音声言語として整理したりできるような、支援の選択肢を用意しておくことが大事。

□子供たちが生活や社会とのつながりを感じながら学べていますか？
＊探究テーマを深めるためには、本物を肌で感じられるように、**具体物や身体性を発揮できるもの**など、予め単元の中に意図的に設定しておくことが大切。

□学習環境は整理（構造化）されていますか？
＊時間の構造化：**単元全体や本時の流れを目に見える形にしておく**ことで、見通しをもって参加できるようにする。
＊場の構造化：**必要なもの・情報・支援の選択肢の所在を分かりやすくする**ことで、子供たちが自分自身でアクセスできるようにする。
※必要な時に友達と相談をしながら学習を進めるといったことも含まれる。

□グループ活動の際に、「話し合いましょう」とだけ伝えていませんか？
＊単に「話し合いましょう」では話合いの視点が散らばってしまいかねないため、**話し合う視点を子供たちに明確に示した上でグループ活動を行い**、何のために話合いを行うのか子供たちと共有することが重要。
＊予め次の点を子供たちに示した上でグループ活動を行うと、視点が明確になる。
◎何のために（目的）◎何を（情報）◎どのように（過程）◎目指すゴール（成果）
＊例えば、「活動の改善策を話し合う」場面では、「活動をよりよくするために（目的）、アンケート結果を（情報）、思考ツールを使って整理し（過程）、新たな課題を見つけよう（成果）」のようなめあてを設定し、グループ活動を行う。

□単に「いいね」「なるほどね」といった声掛けだけになっていませんか？
＊共感や認めることはもちろん大事だが、学びを促進することには必ずしもつながらない。子供の現在地を把握した上で、**目指すゴールに向かうための声掛けを意図的に行う**。
＊例えば、具体的な声掛けや、実況中継のような声掛け（「●●をやっているんだね」「●●のところを工夫しているんだね」）といった声掛けを意識的に行うと効果的。

学力調査からみる授業改善のポイント

令和６年度の各学力調査の結果から分析した戸田市の課題と、授業改善のポイントを紹介します。

授業改善のポイント！

◆令和６年度 全国学力・学習状況調査の結果より

国語

●事実と感想、意見との区別が明確でないなど、自分の考えを伝えるための書き表し方の工夫に課題がある。
●自分の考えは記述しているが、必要な情報を取り出すことや、表現の効果を考えて言葉を選ぶことに課題がある。

学びの系統を踏まえ、本時のねらいに沿って、自分の言葉で考えたり、表現したりする時間を確保し、しっかりと見取りましょう。

算数・数学

●図形や単位量当たりの大きさ（速さなど）について、深い理解を伴う知識の習得やその活用に課題がある。
●複数の集団におけるデータの分布を比較して傾向を捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することに課題がある。

必要感や課題意識をもって数学的活動に取り組むことを通して、実感を伴って思考したり、表現したりする機会を充実させましょう。

◆令和６年度 埼玉県学力・学習状況調査の結果より

国語

●知識・技能が十分に定着せず、単元の学習や授業を離れても、活用できるようにすることに課題がある。
●自分の考えを、目的に応じて適切にアウトプットする経験が不足している。

児童が必要感をもち、学習の目的を明確にして学びに取り組めるよう、学習内容や単元計画を工夫しましょう。

算数・数学

●個に応じた学びや支援が十分とは言えず、「知識・技能」が十分に身に付いていない。
●難易度の高い問題に対する無回答率は高く、必要感のある課題設定やねらいを明確にした数学的活動が十分に行われていない。

日常との関わりを意識した数学的活用を充実させながら、「教科の本質」にせまる「見方・考え方」を明らかにし、価値付けましょう。

英語

〇全体的に正答率が高く、「基礎的・基本的」な事項はしっかりと身に付いている。
●文法、語法の知識・技能の習得については課題が見られる。

英語の文法や語法を実際のコミュニケーションの中で使うなどして、理解を深められるようにしましょう。

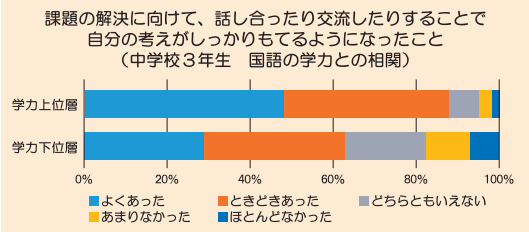
◆授業改善のポイント

・教科の本質をしっかりと捉え、ねらいを明確にした授業づくり
・日常との関わりや他教科との関連を意識させ、子供がじっくり考えたり、表現したりする時間の十分な確保
・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

◆埼玉県学力学習状況調査のクロス集計の分析結果より

埼玉県学力・学習状況調査「質問紙調査」の結果を分析すると、「プランニング方略」や「認知的方略」等の学習方略は、学力との相関があります。これらの力を普段の授業をとおして伸ばしていくことで、学力向上が期待できます。

認知的方略
より自分の理解度を深めるような学習



【認知的方略を伸ばすポイント】

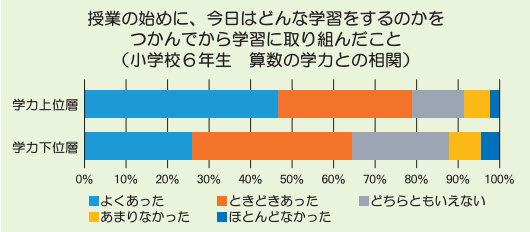
・個々の思考と協働的な学びを十分に確保した学習計画を設定しましょう。
・振り返りを自分の言葉で行い、理解の度合いを意識できるようにしましょう。

授業デザイン例①【小学校 国語】

●小学校４年生「工芸品のみりょくを伝えよう」
●課題：リーフレットでみりょくを知らせよう

工芸品の魅力について紹介するリーフレットを作成する活動を通して、系統立てた推敲の視点をもとに、自分の書いた文書を読み返したり、他者と推敲し合ったりして、伝えたいことを分かりやすく伝える文章を書く。

プランニング方略
計画的に学習に取り組む活動



【プランニング方略を伸ばすポイント】

・対話をとおして、学習のめあてと解決の見通しをもたせましょう。
・それぞれの考えを共有し、対話をとおして、数学的な思考力や表現力を高めましょう。

授業デザイン例②【中学校 数学】

●中学校２年生「一次方程式」
●課題：おすすめのエアコンを考えよう

エアコンの買い替えの場面を設定し、数種類のエアコンについて、本体価格、年間電気代、１時間当たりの電気代などの様々なデータをもとに、年間の電気代を調べ、おすすめのエアコンについて説明する。

「戸田型非同期の学び」指導者用チェックポイント

児童生徒観

□ 学習内容や指導事項について、子供の既習事項の定着状況を把握している。
□ 学習後に目指す子供の姿が明確になっている。

教 材 観

□ 単元の中で、子供に身に付けさせたい資質・能力が明確になっている。
□ 学習内容についての、系統性や既習事項を理解している。
□ 指導事項に即した学習内容となるよう、学習計画や単元計画を立てている。
□ 子供の解決過程を予想し、課題や中心となる発問、声掛けの計画を立てている。
□ 既習事項をいかしながら、子供が学びを深められるよう、支援の手立てを講じている。

指 導 観

□ 子供が課題について理解し、興味・関心を高められるよう工夫している。
□ 学習のめあてや解決の見通しをもとに子供自身が学習計画を立て、解決方針や学習計画の見直し、修正を行えるよう、支援している。
□ 意図的・計画的に同期の場面を取り入れ、進捗を共有したり、情報交換を行ったり、教科の「見方・考え方」を引き出したりしている。
□ 子供の様子をよく見て、適切に指導や支援を行い、子供の学びを見届け評価している。

子供主体のICT活用とデジタル・シティズンシップの一体的な充実を

戸田市においては、戸田市版ＳＡＭＲモデルを基に学びの質の向上を目指し、M段階の学びの推進を目指しています。また、子供主体のＩＣＴ活用が進むことで、情報モラルからデジタル・シティズンシップ（以下、ＤＣ）へと学びの質的変換を図る必要があります。

戸田市プログラミング・ＩＣＴ教育研究推進委員会では児童生徒の「M段階の具体の姿」や「ＤＣを発揮している姿」を話し合い、実現に向けたポイントをまとめました。

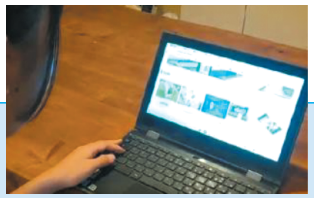
S【代替】Substitution	A【増強】Augmentation	M【変革】Modification	R【再定義】Redefinition
アナログでできたことをデジタルで代用 ★紙でもできる活用にとどまる デジタルの特性が発揮されていない	デジタルの特性を生かして、学習効果を増大 ★デジタルの利用により付加価値が加わる 活用経験・スキルが蓄積	授業デザインが変容し、新たな学びの実践へ ★個別最適な学びや協働的な学びの実現に近づく 授業観・教師の役割の変容	実社会の課題解決や新たな価値の創造 ★実社会の課題解決や新たな価値を創造する 社会に開かれた活用

教具的活用　教師が活用の指示 ➡ 活用場面を子供と考える ➡ 活用場面を子供が決める　**文具的活用**

情報モラル　心情規範・他律的・同一・自制 ⟶ 行動規範・自律的・多様・活用　**デジタル・シティズンシップ**

M（変革）段階の子供の姿

- ツールの特長を自分の言葉で説明でき、日常的に使っている
- 目的に応じて、ドリルやプレゼンテーションのソフトを自分で選択している
- 共同編集などを活用し、友達と情報共有や相互評価をしながら学習を進めている
- 授業中だけではなく、授業外や家庭でも自ら学びを進めている（非同期な学び・シームレスな学び）



共有サイトを見ながら
自分のペースで予習・復習

教師の支援

【授業での支援例（指導観と関連）】
- ＩＣＴ活用が目的化しないように、学習のゴールを明確に示す
- 学習状況を把握し、身に付けさせたい資質・能力を意識した発問や評価を行う

【授業外での支援例】
- 係活動や委員会活動など、授業外での活用を促す
- 共有サイト等でいつでも学習内容を確認できるように学習環境を整える

子供主体の活用のためには、A段階での十分な指導と経験が必要です。「子供主体」が「放任」にならないよう、どの段階においても教師は見届けと支援を行いましょう。

R５指導の重点
M段階へのステップ

R６指導の重点
M段階の実践例

R４指導の重点
SAMRモデルとは
DCへの質的変換

DCを発揮している子供の姿

- デジタルのメリットとデメリットを理解した上で、自分で使い方をコントロールしている
- 調べ学習やプレゼンテーションの際に、出典や根拠を明らかにしている
- 相互評価や情報発信の際に相手を傷付けないよう、発信内容に配慮している
- 授業外や学校外においても、情報リテラシーを活用して行動している

核となるDC授業
「責任ある発信とは？」

教師の支援

【子供主体の学び】
- 一方的な制限や禁止ではなく、子供と一緒にルールを定め、適宜見直しをする
- 小さな問題や失敗が起こった時こそがチャンスと捉え、一緒に解決策を考える

【核となる授業】
- 各教科とDCとの関連を年間指導計画に反映させ、様々な教科を通じて指導する

【家庭との連携】
- 懇談会でＤＣの考え方について情報発信し、家庭との連携を強める

各学校で作成したDCの全体計画・年間指導計画をもとに、①子供主体の学び、②核となる授業、③家庭との連携を柱としてデジタル・シティズンシップを育成しましょう。

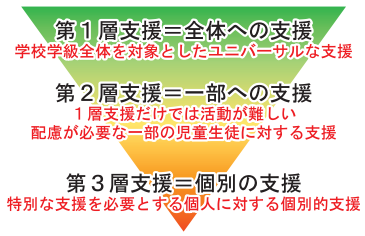
R５指導の重点
DC授業のポイント

R６指導の重点
DC育成の3つの柱

「多層的な支援システム」の第２層・第３層の充実

「多層的な支援システム」は、全体に効果的な指導や支援（＝第１層支援）を行いながら、データをもとに児童生徒の反応をつかみ、**効果が見られるよう支援方法や指導方法を変えていくこと**です。また、個から集団へと階層的なアプローチ（第１層・第２層・第３層）をすることで、対象を絞り込んでいくことです。

多層的な支援システム



多層的な支援を充実するための実態把握のポイント

①客観的なデータを用いること
例えば学習面であれば単元テストの結果を用いて到達度をみる、行動面であれば具体的な行動を記録したものをみる。

②第１層支援が有効であったか振り返りをした上で第２層、３層支援を検討すること
例えば単元テストが学級全体で低い場合、まず、授業で第１層支援ができていたかを振り返る。（全体へのわかりやすい指示・指導ができていたか、ユニバーサルデザインを取り入れた授業になっていたか、等）

この子は第１層、この子は第２層…と決めるものではありません。「国語は第１層支援で理解できるが、算数では第２層支援が必要」といったように**活動内容や成長段階によって、どの層の支援であるか変わります**。
以下は第２層・第３層の充実を図るための具体例です。

第2層支援の例　机間指導等で「実態を観察」し該当する児童生徒へのフィードバックを増やす

ポイント１
児童生徒の活動を
修正する

場面：（算数）かけ算九九
例①問題に取り組めない
　机間指導の際に行動を促す声掛けを行う。
　「どこが難しいかな。」「先生と一緒にやってみようか。」
例②習得しきれていない
　九九表を用いて「これを見てね」と**活動を修正する**支援を加える。

ポイント２
児童生徒の活動を
称賛する

場面：（社会）江戸時代と明治時代の変化を比較
取組がめあてとずれてしまうことが多い児童生徒がめあてに正対して取り組めた際には、**結果や作成の過程を褒めて定着を促したり、価値付けたりする。**
「△△の資料を使っていて変化が分かりやすいね。」
「〇〇の部分がとても伝わりやすい内容だね。」
「それでバッチリ！」（行動の強化のための肯定的な称賛）

第3層支援の例　該当する児童生徒の実態に応じて個別に目標の修正や課題の選択肢を用意する

ポイント１
課題や支援の
選択肢を用意する

場面：（国語）物語文の要点の説明
例①要点をまとめられない
　記述式でまとめるのではなく、穴埋め式も用意し**選択できる**ようにする。
例②説明できない
　説明内容をノートやタブレットに打ち込み、発表以外の形を**選択できる**ようにする。

ポイント２
困難の状況を
チームで分析・支援する

場面：担任だけでは事前の支援の準備が困難
個人だけではなく、**複数の視点で多面的に検討するため、チームでも対応**していく。例えば、同じ教科を担当する教員や、特別支援教育コーディネーター、管理職と困難の情報を共有して、支援策を考えたり、教材の準備をしたりする。
「サポートミーティング」を取り入れるのも効果的である。
（第１層支援の例の二次元コード⑥参照）

第１層支援の支援を広げることで、個別の支援を必要とする第２層・第３層の児童生徒へ必要な支援が届くようになります。そのための具体例を示してあります。

▼第1層支援の例➡下記バックナンバー参照

年度	ページ	戸田市　指導の重点・主な施策	二次元コード
H30	11	授業のユニバーサルデザイン化	①
R2	11	児童生徒の「気になる行動」へのアプローチ	②
R3	10	ポジティブな行動支援（PBS）	③
R4	10	インクルーシブ教育の充実に向けて	④
R5	5	多様な教育的ニーズへの対応	⑤
R6	9	個別最適な学びを実現するための「多層的な支援」の実践例	⑥

①　②　③　④　⑤　⑥

教育総合データベースの活用と留意点

■目　的

これまで	・各種調査・アンケートのデータは**個別**に管理・活用されるにとどまっていた。 ・データを確認したいときに、データを探す作業から始めなければならなかった。 ・複数の調査結果を**見比べながら**子供一人ひとりの状況を検討することは、膨大な手間がかかり、現実的ではなかった。
これから	・データの**一元化と一覧化**により、必要なデータの捜索や加工に係る負担を軽減する。 ・**データを活用**することで、**各教員が目線を揃えて**話し合いができるようになり、児童生徒への効果的な**「見守り」・「見届け」**を行えるようになる。 ・データの活用が進むことで、収集・整理が必要なデータが一層明確になり、活用が深化する。

■教育総合データベース、ダッシュボードの構築と今後の活用

本市では子供たちの支援・指導の充実に繋げるため、**子供に係る様々なデータをワンストップで確認できるように教育総合データベースを整備**している。あわせて、当該データを抜粋し、**グラフ等でビジュアル化した「ダッシュボード」を構築**し、様々なデータを効率的に確認できるようにした。

ダッシュボードには全ての学校管理職・教員がアクセス可能（一部ダッシュボードは管理職のみにアクセスを限定）。

管 理 職

＊過去データや市の平均と比較等を行うことで、**学校・学級レベルの課題を特定**すること
＊必要に応じて個々のデータを参照すること
＊管理職のみ閲覧可能な情報については、**教職員の支援や指導のために活用**すること

利用可能なダッシュボード
・児童生徒ダッシュボード
・学校×市平均ダッシュボード
・授業がわかる調査集計（管理職用）

教 職 員

＊過去データや市の平均と比較等を行うことで、**担当学年・学級レベルの課題を特定**すること
＊個々のデータを参照し、**個別の指導や支援の参考**にすること

利用可能なダッシュボード
・児童生徒ダッシュボード
・学校×市平均ダッシュボード

例 ダッシュボードの活用フロー

STEP 1 気付き

日常の授業や指導の中で、学習状況や行動に課題を感じる子供を把握

STEP 2 分析
①ダッシュボードにアクセス
②担当学年、クラス等でフィルタリング
③気になる児童生徒のデータを確認

児童生徒の各種データの概要を確認し、課題等の特定に活用

ダッシュボードに整理された様々なデータを確認することで、子供の現状把握や分析に活用

STEP 3 支援

見守り、声掛け、面談、ぱれっと・きゃんばすルームへの接続等

■留 意 点

以下の点に留意の上、学校経営、学級経営、個別指導のためにデータを活用する
・**差別的な取扱いをせず**、適切な現状把握や分析に役立てるようにする
・**個々の子供たちの成長や伸びに注目**する（平均値との比較に囚われない）
・数値化できない情報があることも認識し、**データを鵜呑みにせず、経験や勘も引き続き大切にする**
・**情報の取扱いに注意する**

教育データ利活用に関するガイドライン